「中高生の放課後の過ごし方や体験活動に関するアンケート」調査

分析結果報告

平成 31（2019）年３月

横浜市こども青少年局青少年育成課

趣旨・概要

横浜市の青少年施策のうち、中高生の居場所づくり、社会体験の機会提供や地域参画に関しては、これまで青少年自身やその保護者のニーズと現状把握が十分ではありませんでした。

今回のアンケートでは、よこはまユースが過去に実施した「青少年の居場所に関するアンケート調査」（平成 28 年度実施。市内中高生対象）と「青少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」（平成 29 年度実施。市内 20 歳代～60 歳代対象）を踏まえ、中高生とその保護者に対して体験活動経験とその影響をあらためて調査すると共に、中高生の放課後の過ごし方の実態や、学校以外での活動に求めるもの、そして居場所に対する意識などについて調査しました。併せて、居場所と体験機会の提供を通して青少年が自らの生き方を考え、社会参画に向かう力を育てることを目的に市内６区に設置されている“青少年の地域活動拠点”の利用に関する項目も加えています。以上から体験活動と青少年の興味関心や意欲、及びそれらの相関関係の分析を行ない、社会全体で子ども・青少年を育んでいく基盤づくりに資する基礎データを集積するために実施しました。なお、報告は中高生全体の傾向を見るために中学生と高校生を合わせた数字を使用し、母集団での傾向を見るため、サンプルにウェイトをつけて集計を行なっています。

アンケート手法

■実施時期：平成 30 年６月～平成 30 年９月

■調査対象及び実施方法

①市立中学校生徒及び保護者（36 校、5,084 人）
- 対象範囲：市立中学校（各区２校）、第２学年の全生徒及びその保護者。
- 実施方法：生徒、保護者それぞれの調査票を学校に送付。生徒及び保護者に配布し、それぞれ記入・封緘したものを学校でとりまとめて回収。

②市立高等学校生徒及び保護者（７校、5,680 人）
- 対象範囲：市立高等学校全生徒及びその保護者
- 実施方法：生徒、保護者それぞれの調査票を学校に送付。生徒及び保護者に配布し、それぞれ記入・封緘したものを学校でとりまとめて回収。

③県立高等学校生徒及び保護者（53 校、41,642 人）
- 対象範囲：県立高等学校全生徒及びその保護者
- 実施方法：各学校に QR コードを記載した案内文を学校に送付。生徒及び保護者に配布し、インターネット上で回答が得られたものを回収

■標本数

①市立中学校（第２学年）
- 集計校：36 校 ／36 校中、回収率 100%
- 回答数：生　徒：4,416 人／5,084 人中、回収率 86.9%
  　　：保護者：2,605 人／5,084 人中、回収率 51.2%

②市立高等学校
- 集計校：７校／７校中、回収率 100%
- 回答数：生　徒：4,998 人／5,680 人中、回収率 88.0%
  　　：保護者：2,321 人／5,680 人中、回収率 40.9%

③県立高等学校
- 回答数：生　徒：435 人／41,642 人中、回収率 1.0%
  　　：保護者：305 人／41,642 人中、回収率 0.7%

※実施方法や回答数をふまえ、中高生全体での傾向を把握するための分析を行う際には、県立高等学校データは加味していません。

実　　施：横浜市こども青少年局青少年育成課　　**受　　託**：公益財団法人よこはまユース

調査監修：土屋隆裕（横浜市立大学）　　**協　　力**：北村克久研究室（鎌倉女子大学）

調査に見る中高生の放課後の過ごし方や体験活動の現況

放課後の過ごし方と地域活動拠点への関心

■中高生は約９割が「自宅・自室」を居場所だと感じており、実際に「自宅」「学校」「学習塾」で放課後を過ごしている。

■中高生の８割は“青少年の地域活動拠点”を知らないが、約半数は利用に肯定的である。

体験活動と興味関心や意欲の傾向

■社会体験が豊富なほど、社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高く、社会性や自立心、自己肯定感が高いほど、他者との関わりに積極的である。

中高生の保護者の傾向

■保護者は学習だけでなく社会で役立つ体験やスキルの獲得など、将来に向けた実利ある経験を求める傾向が高い。

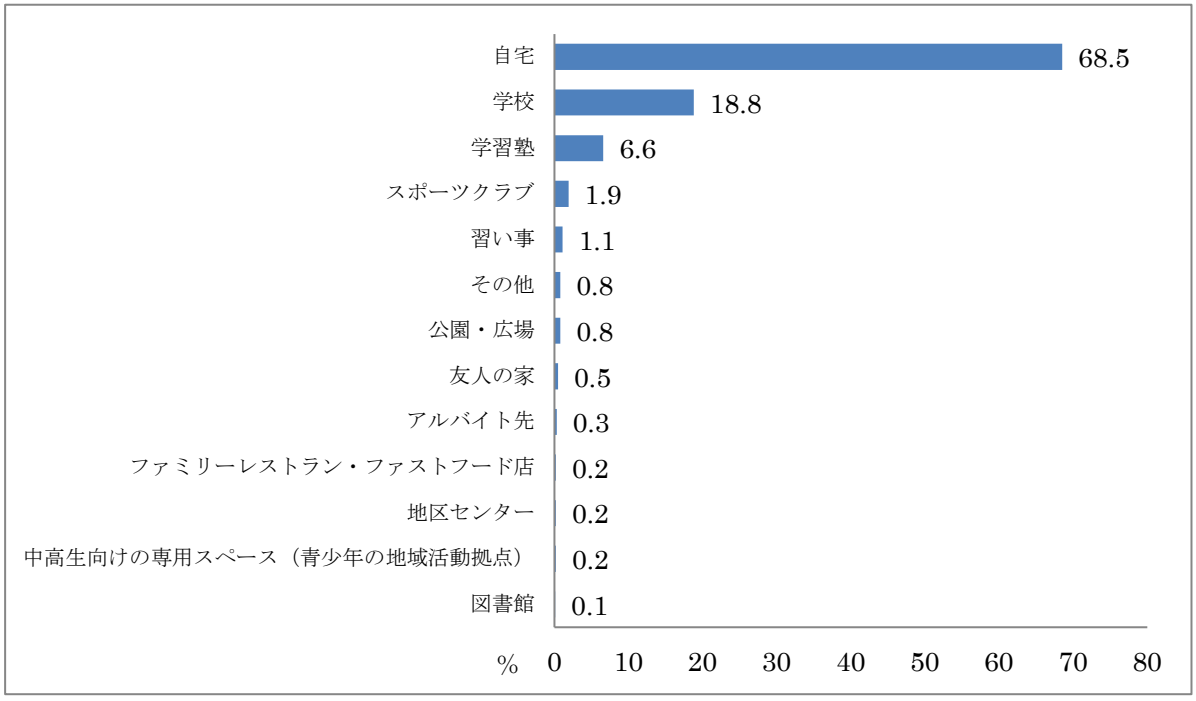
■保護者も８割が“青少年の地域活動拠点”を知らないが、８割の保護者が利用に肯定的である。

放課後の過ごし方と地域活動拠点への関心

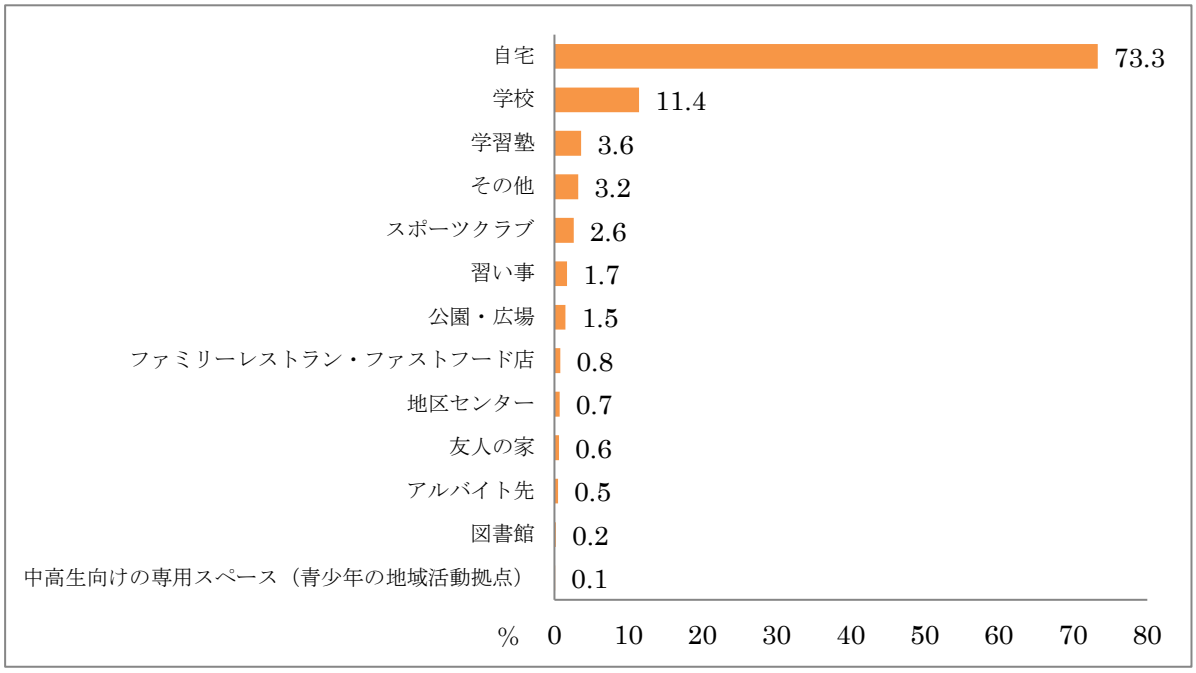
■放課後に一番多く過ごした場所は「自宅」「学校」「学習塾」

■中高生が放課後に過ごした場所として、平日・休日ともに「自宅」と「学校」であり、自宅、学校以外だと「学習塾」の割合が高く、放課後も学習の時間にあてる中高生の姿が垣間見えた。

Q平日の放課後　１番目に多く過ごした（4つまで回答）　〔n＝8,592〕



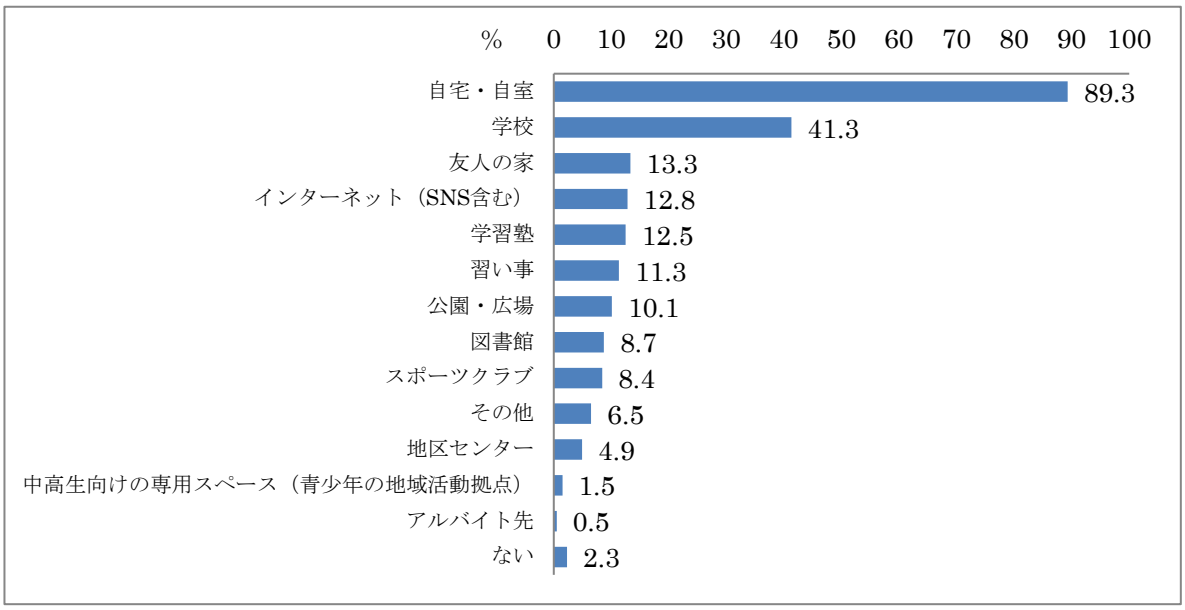
Q休日の放課後　１番目に多く過ごした（４つまで回答）　〔ｎ＝8,558〕



■中高生の約 90%が「自宅・自室」を居場所だと感じている

■中高生が具体的に居場所と感じている場所は「自宅・自室」、「学校」の順でほぼ占められ、居場所と感じている場所と実際に過ごしている場所とがほぼ一致した。それ以外だと「友人の家」、「インターネット」、「学習塾」の順となった。この結果からあらためて中高生にとって「家」は最も基本的な居場所としての役割を担っている結果となった。ただし「ない」も 2.3%あった。

Q居場所だと感じる場所（複数回答）　〔ｎ＝9,414〕

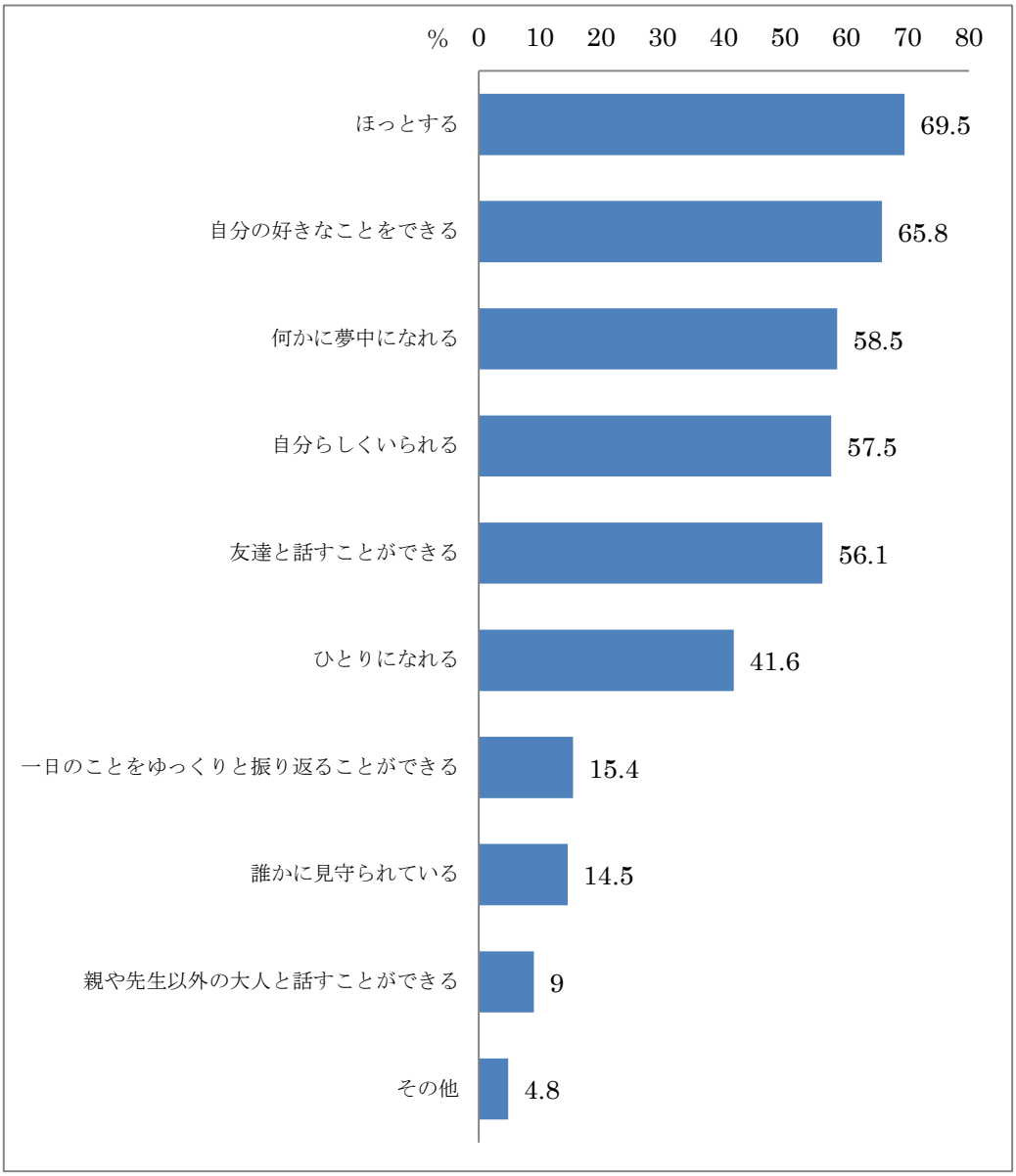


参　考

■安心感を求めるだけではない居場所のイメージ

■中高生が居場所だと感じる場所は「ほっとする」「自分の好きなことができる」「何かに夢中になれる」「自分らしくいられる」「友達と話すことができる」の順で回答があった。一番多かったのは安心感を求める「ほっとする」だが、それ以外だと「自分の好きなことができる」をはじめとして、勉強であれ部活動であれ何かに取り組むことや、他者との比較や関係性によって生じる項目が選ばれている。このことから中高生がイメージする居場所は、自己の安心を得られるだけでなく、何かと関わることを意識したイメージで捉えていることがわかる。

Ｑあなたが居場所だと思う場所（複数回答）　〔ｎ＝9, 414〕



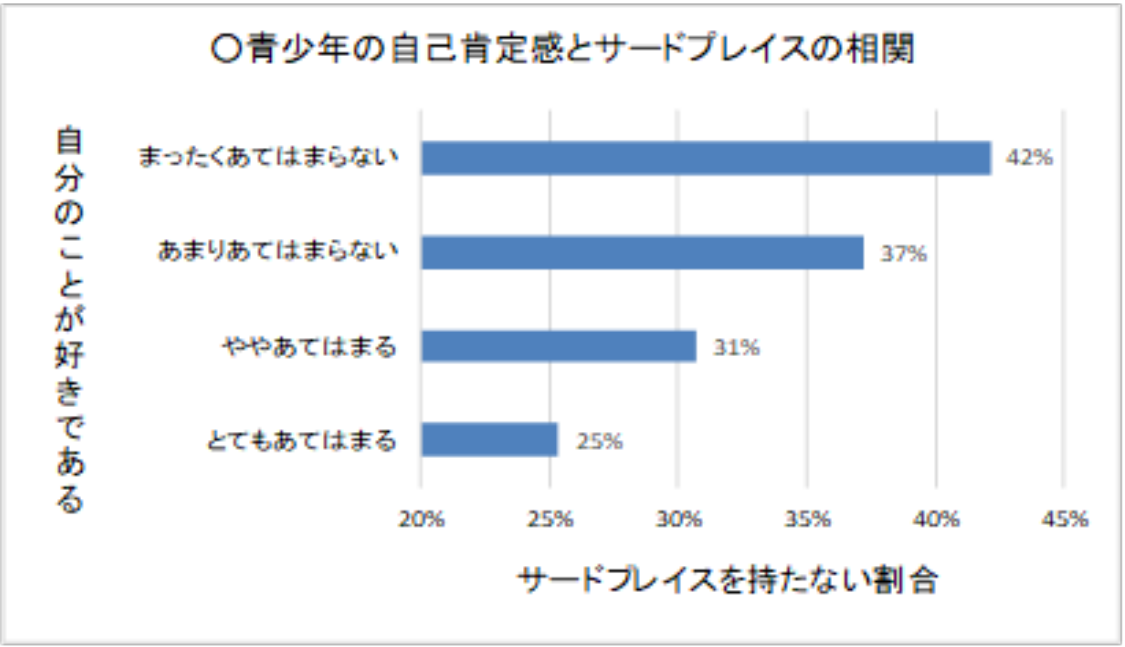
参　考

■青少年の自己肯定感とサードプレイスの相関

■「Ｑ自分のことが好きである」と、「Ｑあなたが居場所だと感じる場所」でクロス集計を行ったところ、自己肯定感が低い青少年ほど、サードプレイスを持たない（※）傾向にあることがわかった。

※「Ｑあなたが居場所だと感じる場所」について、「自宅・自室のみ」、「学校のみ」、「学習塾のみ」、「インターネット（SNS 含む）のみ」、「ない」と回答した、居場所がない、もしくは単一の居場所しか持たない青少年。

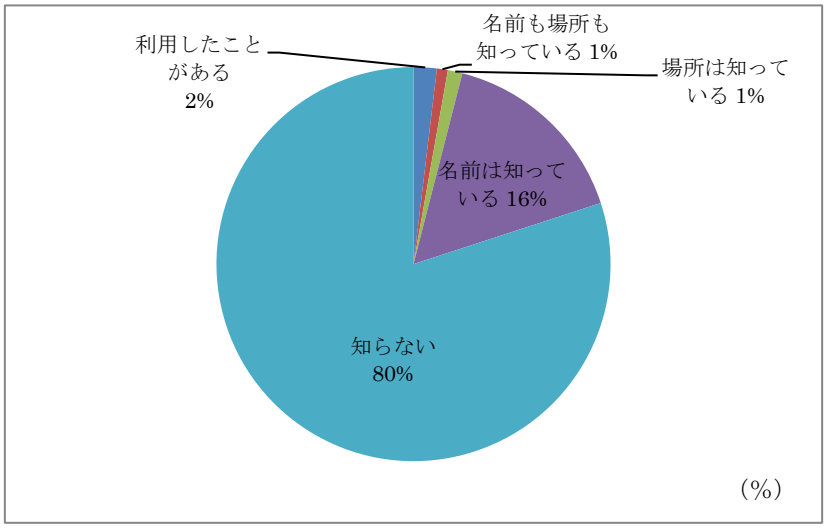
　学校・家庭・学習塾等以外の第三の場における多様な人との交流や体験の機会により、青少年自身が多様な価値観に触れることの重要性が垣間見える。



■中高生の 80%は“青少年の地域活動拠点”を知らない

■青少年の地域活動拠点は市内 6 区だけに設置されているため、未設置区や設置区でも中高生の行動範囲外に設置されている場合など環境の差はあるが、青少年の地域活動拠点の存在について中高生で 80%が知らないという結果となった。また、「名前も場所も知っている」「場所は知っている」「名前は知っている」は合わせて 18%あるが、実際の利用は 2%にとどまった。

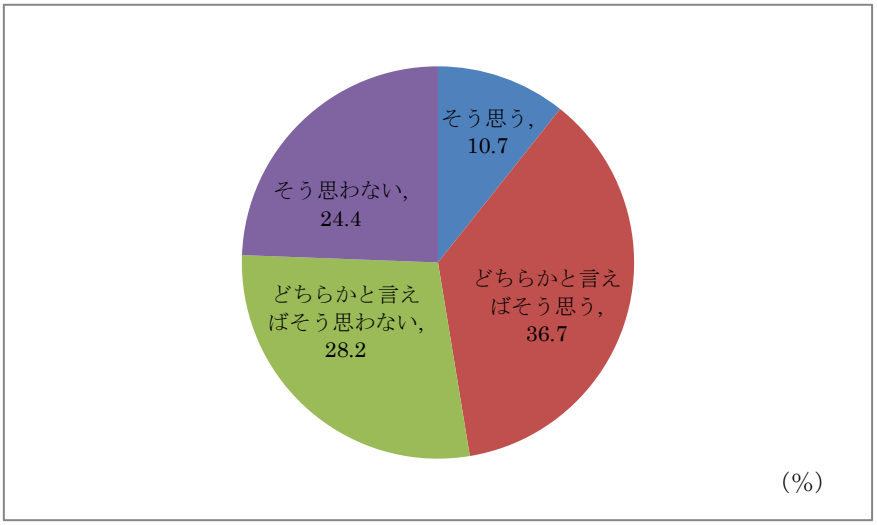
Q「青少年の地域活動拠点」をご存知ですか　〔n＝8, 822〕



■中高生の約半数は、青少年の地域活動拠点を利用したいと思っている

■「地域活動拠点を利用したいか」に対しては「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という肯定的回答が 48%という結果となった。上記の地域活動拠点の存在を知っているかの回答で 80%が知らないと回答しているにも関わらず、利用を希望する肯定的回答が半数近くあることは、放課後を過ごす場所への興味や関心を示したものと考えられる。

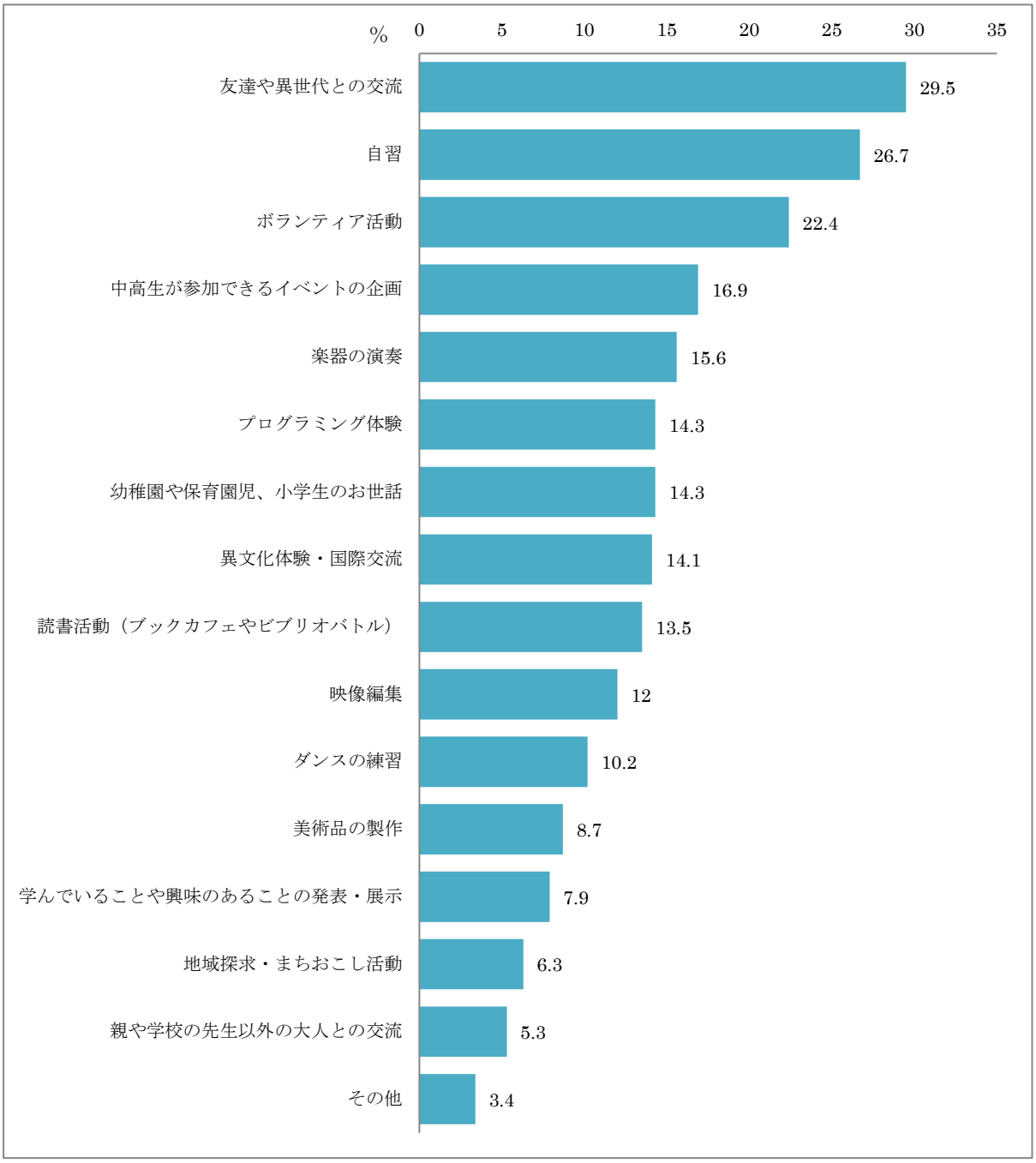
Qあなたは、「青少年の地域活動拠点」を利用したいと思いますか　〔n＝8, 625〕



■青少年の地域活動拠点では、友達や異世代との幅広い交流を求めている

■青少年の地域活動拠点でどのような活動をしたいと思うかでは「友達や異世代との交流」、「自習」、「ボランティア活動」、「中高生が参加できるイベントの企画」、「楽器の演奏」の順で回答が高く、地域活動拠点では、友達や異世代との交流、学習の場としての利用、ボランティア活動の機会を求めているという結果が出た。

Q「青少年の地域活動拠点」ではどのような活動をしたいと思いますか（複数回答）　〔n＝9,414〕



体験活動と興味関心や意欲の傾向

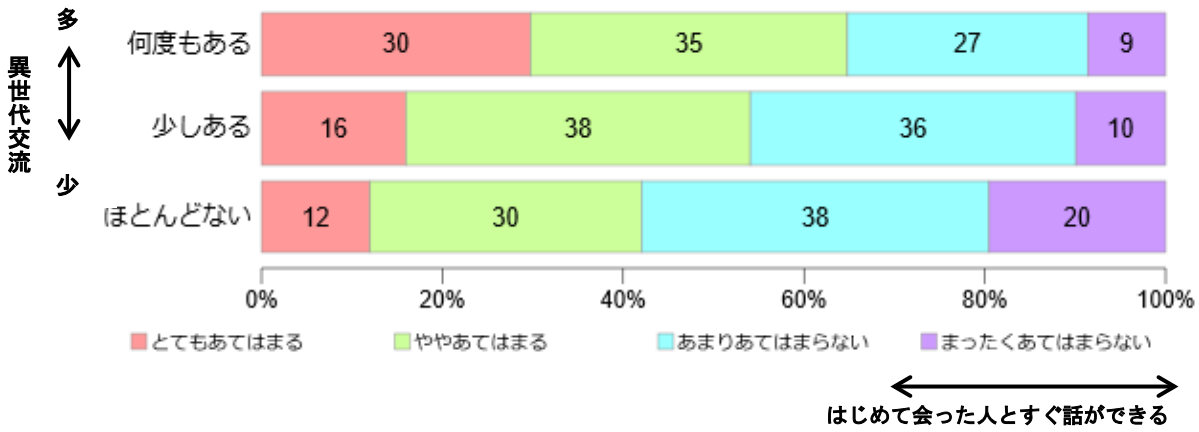
※社会体験とのクロス集計

■社会体験が豊富なほど、社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高い

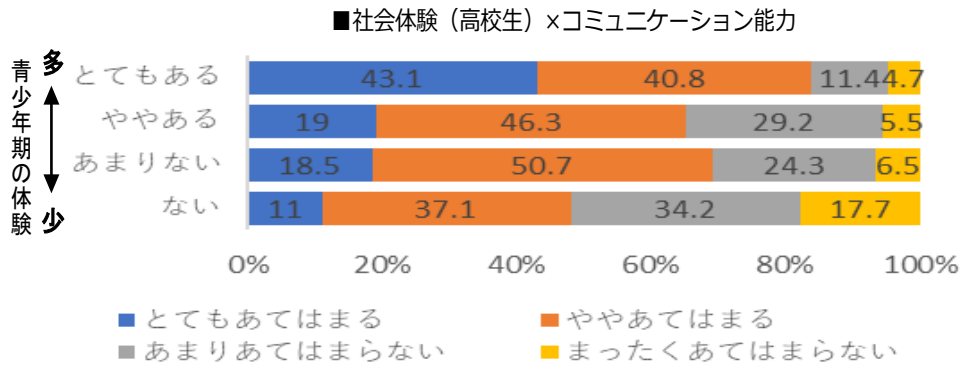
■社会体験と興味関心や意欲との関連を見るため、①異世代交流とはじめて会った人とすぐ話ができる（他者との関係、コミュニケーション）とのクロス、②近所の人への挨拶など身近な大人とコミュニケーション（地域の大人との交流）と経験したことのないことへのチャレンジしたい（挑戦しようとする意欲）とのクロス、③自分自身でアイデアを出したり他者と協力しながらイベントの運営に携わる機会（主体性の発揮）と失敗してもあきらめずに挑戦しようとする（やりぬく力）とのクロス集計をしたところ、社会体験が豊富なほど、社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高い傾向となっている。これは平成 29 年度に大人を対象に実施した「青少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」で示された青少年期の体験活動の傾向が、中高校生でも同様の傾向を示す結果となった。

①【社会体験×コミュニケーション】

Q異世代と一緒に遊んだり、活動すること×Qはじめて会った人とすぐ話ができる



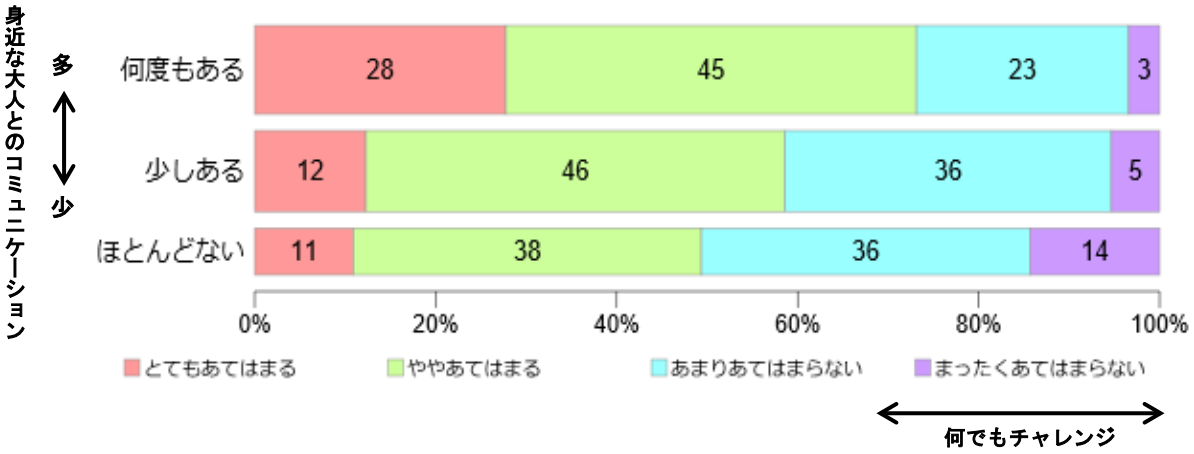
参　考



※平成 29 年度（公財）よこはまユース「少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」より

②【社会体験×挑戦意欲】

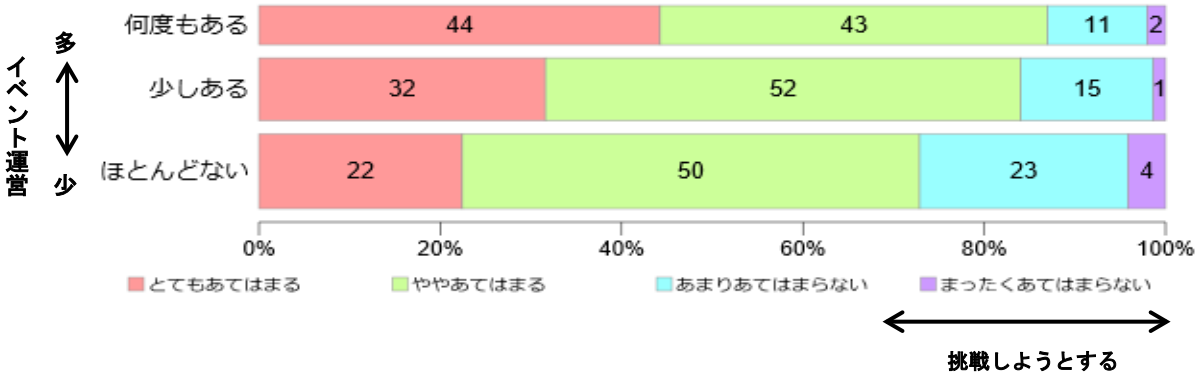
Q近所の人とのコミュニケーション×Q経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい



③【社会体験×やりぬく力】

Q自身でアイデアを出したり、他者と協力しながらイベントの運営に携わること

×Q失敗してもあきらめずに挑戦しようとする



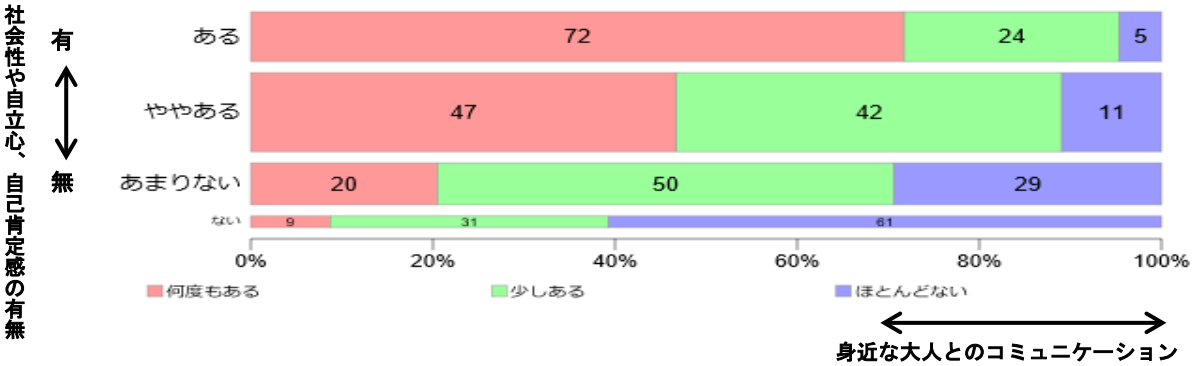
※社会性や自立心、自己肯定感の有無とのクロス集計

■社会性や自立心、自己肯定感が高い人ほど、他者との関わりに積極的

■青少年の社会性や自立心、自己肯定感を問う項目で「ある」「ややある」「あまりない」「ない」と回答した人を抽出し、①「近所の人とのコミュニケーション」、②「多くの人の前で学んだことや自分自身の取組を発表する」とクロス集計した。社会性や自立心、自己肯定感を問う項目で「ある」と回答した人は、他者との交流や他者への発信において積極的である傾向が見られた。

①【社会性や自立心、自己肯定感の有無×社会体験】

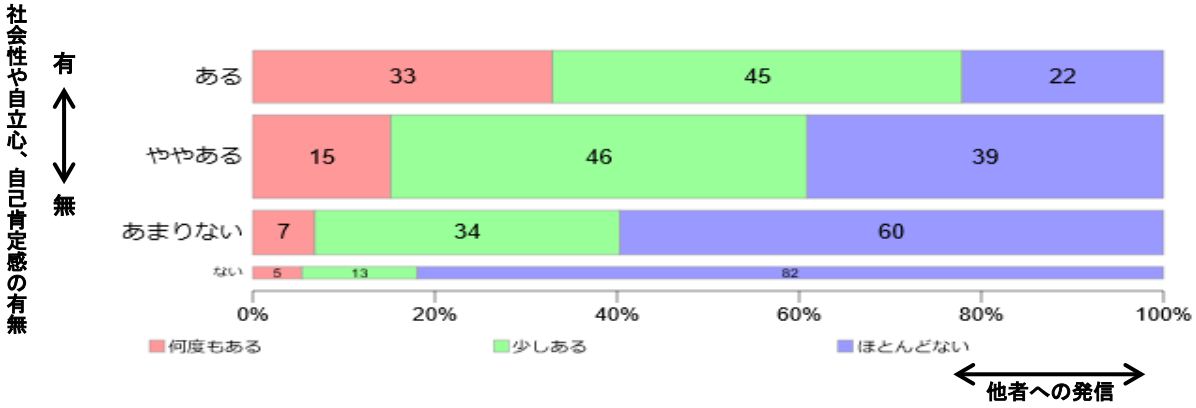
Q社会性や自立心、自己肯定感の有無（合成変数）×Q近所の人とのコミュニケーション



②【社会性や自立心、自己肯定感の有無×伝える力】

Q社会性や自立心、自己肯定感の有無（合成変数）×

Q多くの人の前で学んだことや自分自身の取組を発表すること

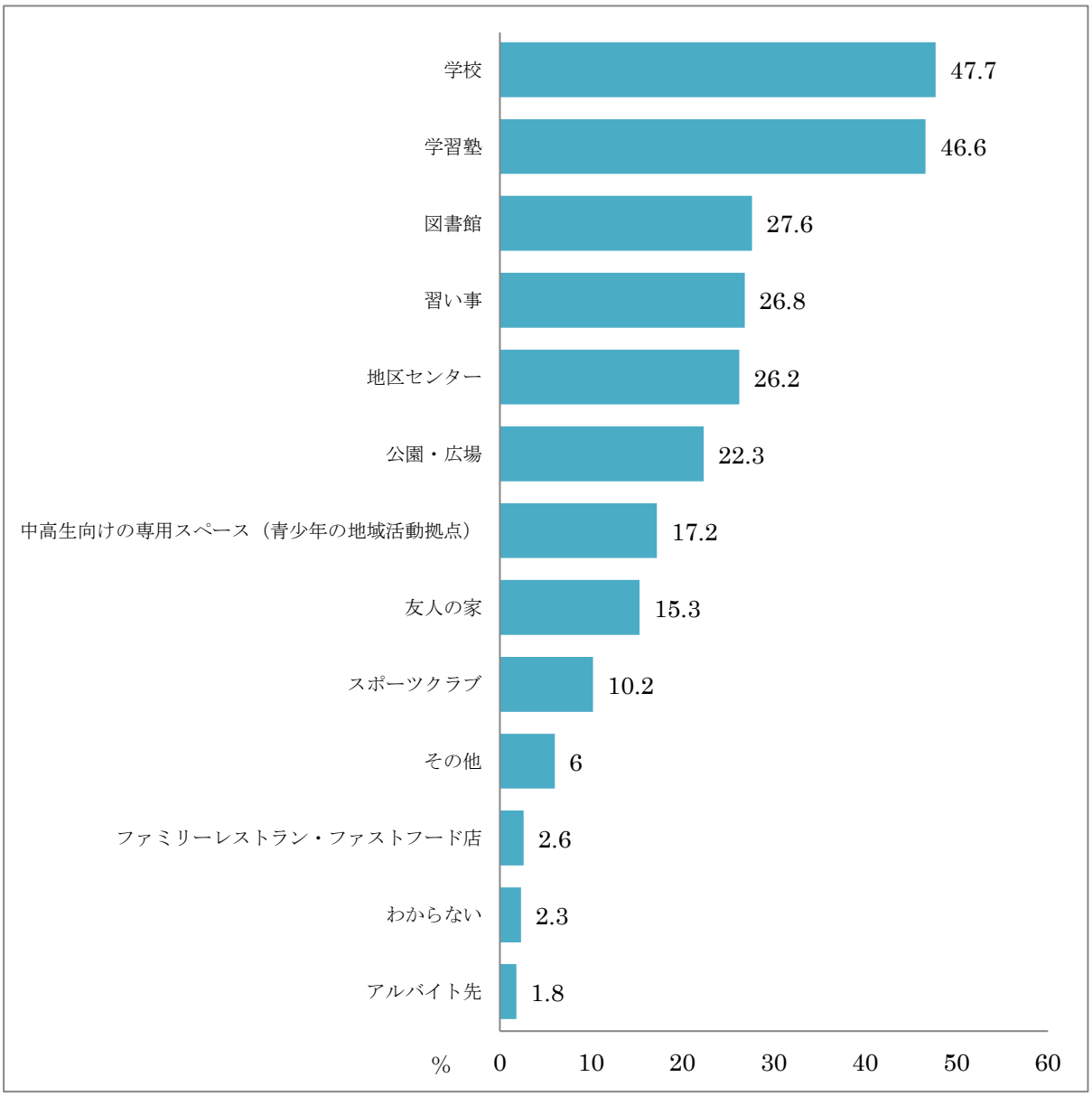


中高生の保護者の傾向

■放課後もしっかり学んでほしいと考えている

■保護者が求める放課後の過ごし方としては「学校（部活動や生徒会活動など）」、「学習塾」、「図書館」、「習い事」、「地区センター」の順となっている。全体的に勉強や習い事といった教育的視点で放課後を過ごしてほしいという思いが反映された形となったが、次に多かった回答では「公園・広場」、そして「中高生向け専用スペース」があり、地域活動拠点の存在の認識、あるいは施設への期待が回答につながったのではないかと考えられる。

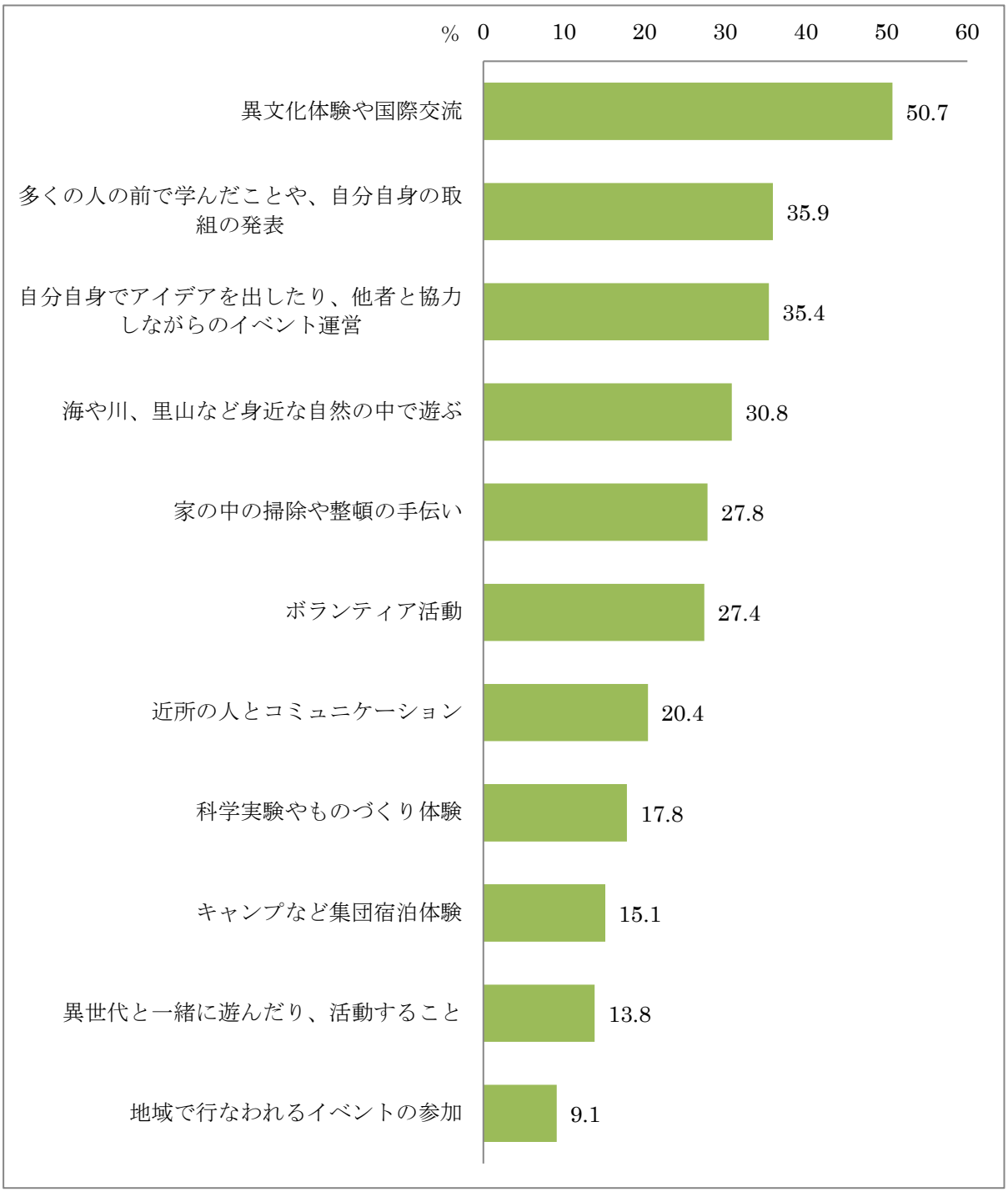
Ｑあなたは、お子様の平日の放課後や休日の過ごし方として、自宅以外の場所を考えた場合、どのような場所で過ごしてほしいと思いますか（複数回答）　〔保護者ｎ＝4, 926〕



■子どもには社会に出てから役立つ体験やスキルを獲得させたい

■子どもにさらに多く体験してほしいと考えている１位は「異文化体験や国際交流」であり、次いで「多くの人の前で、学んだことや自分自身の取組を発表すること」、そして「自分自身でアイデアを出したり、他者と協力しながらイベントの運営に携わること」が続く。保護者が子どもに体験してほしいと考えているのは、将来、社会に出た時に役立つ体験やスキルであり、より現実的で直接的なものである傾向が読み取れる。これは非日常体験を求める傾向にある中高生と明らかに違う結果となった（次頁「参考」を参照）。

Ｑ中高校生時代のうちにより多く体験させたいこと（4つまで回答）　〔保護者ｎ＝4, 926〕



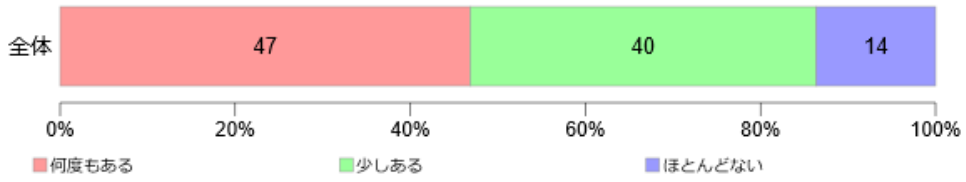
参　考

中高生は、非日常体験をしたいと思っている

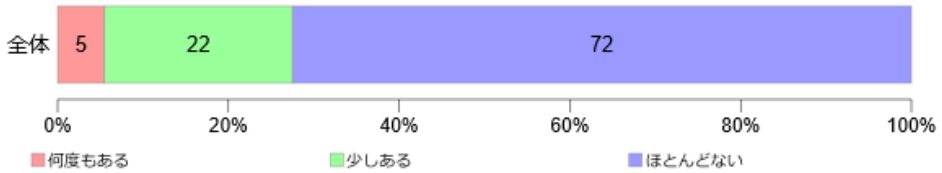
■中高生がより多く体験したいと考えている１位は「海や川、里山など身近な自然の中で遊ぶこと」、２位は「キャンプなど集団での宿泊体験」という回答結果となった。下図のＱ【自然体験】で小学生と高校生を比較すると、自然体験が少なくなっていることが分かる。年齢が上がるにつれて体験機会が少なくなる自然体験のような非日常的な活動を求める傾向は、横浜市の地勢を反映した結果とも考えられる。

Ｑ【自然体験】海や川、里山など身近な自然の中で遊ぶこと

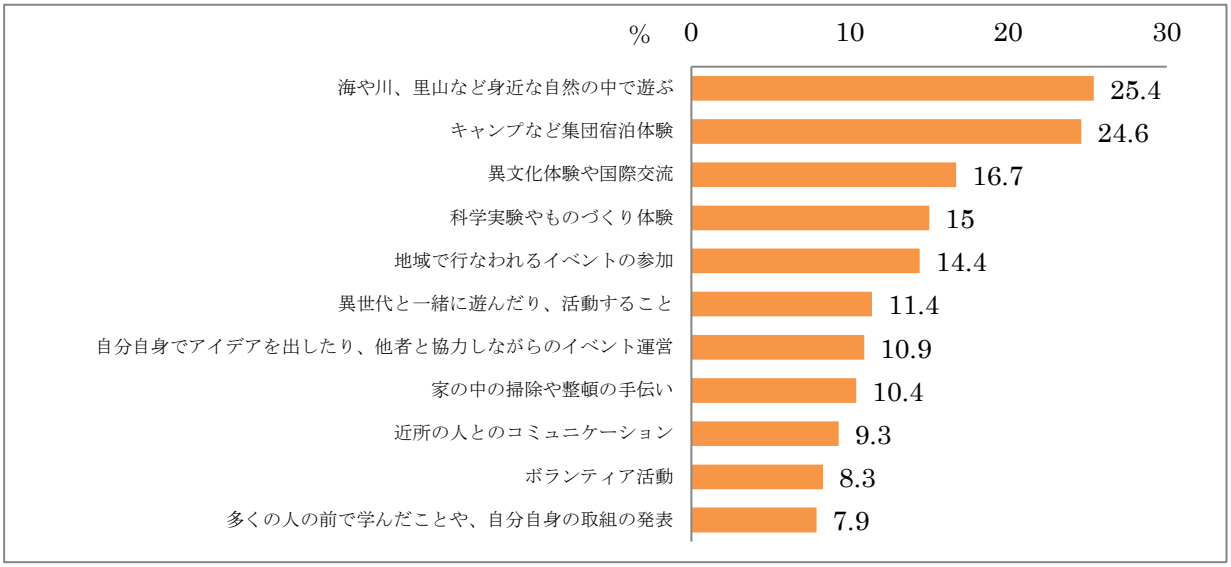
【小学生の時】　〔ｎ＝9, 331〕



【高校生の時】　〔ｎ＝4, 910〕



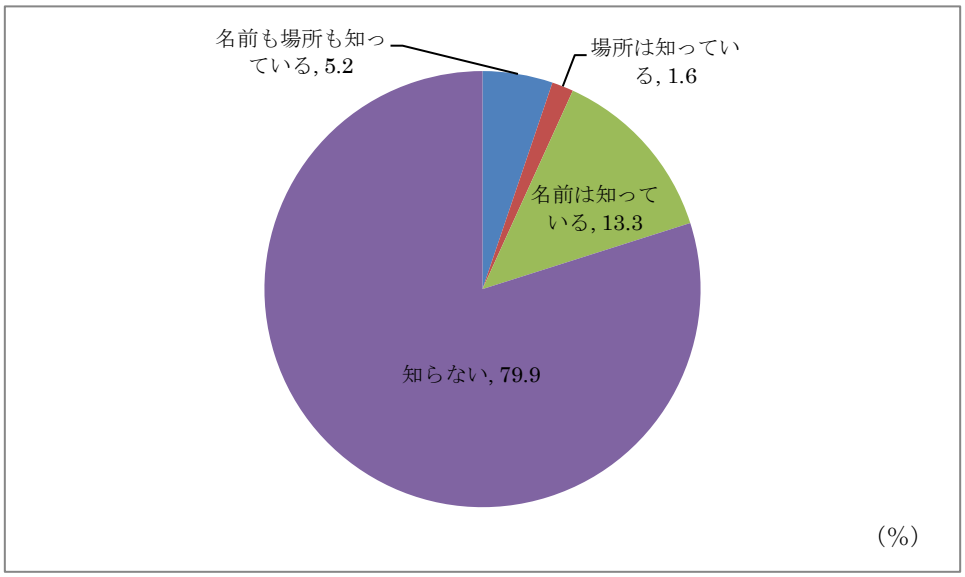
Ｑ中高校生時代のうちにより多く体験したいこと（４つまで回答）　〔ｎ＝9, 414〕



■保護者も 80%が“青少年の地域活動拠点”を知らない

■中高生の保護者も市内６区だけに設置されている「青少年の地域活動拠点」について８割が知らないという結果が出た。生徒、保護者ともに数値に大きな開きはなく、地域活動拠点の周知の必要性が浮き彫りとなった。

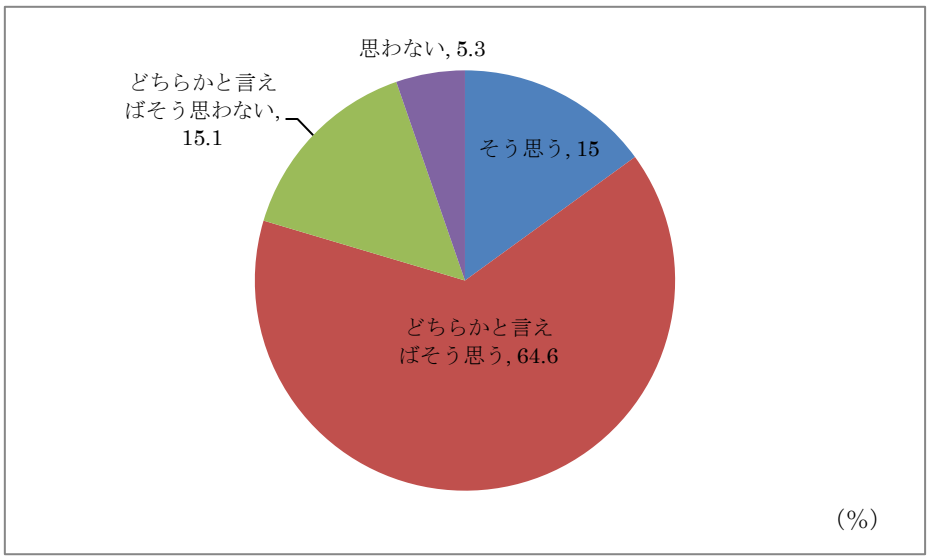
Q「青少年の地域活動拠点」をご存知ですか　〔保護者ｎ＝4, 889〕



■80%の保護者が地域活動拠点の利用に肯定的

■子どもに地域活動拠点を利用してもらいたいかでは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を含めた肯定的回答が 80%と過半数を大きく占める結果となった。この数字は、生徒回答で半数に至らなかった結果と比べると大きな違いとなっている。80%の保護者が地域活動拠点の存在を知らないと回答しているが、今回の調査で拠点の存在を知り、その活動内容を知ったことで、利用した方が子どもにとって良い影響があると判断したのではないかと推測される。

Qお子様に「青少年の地域活動拠点」を利用してほしいと思いますか　〔保護者ｎ＝4, 698〕

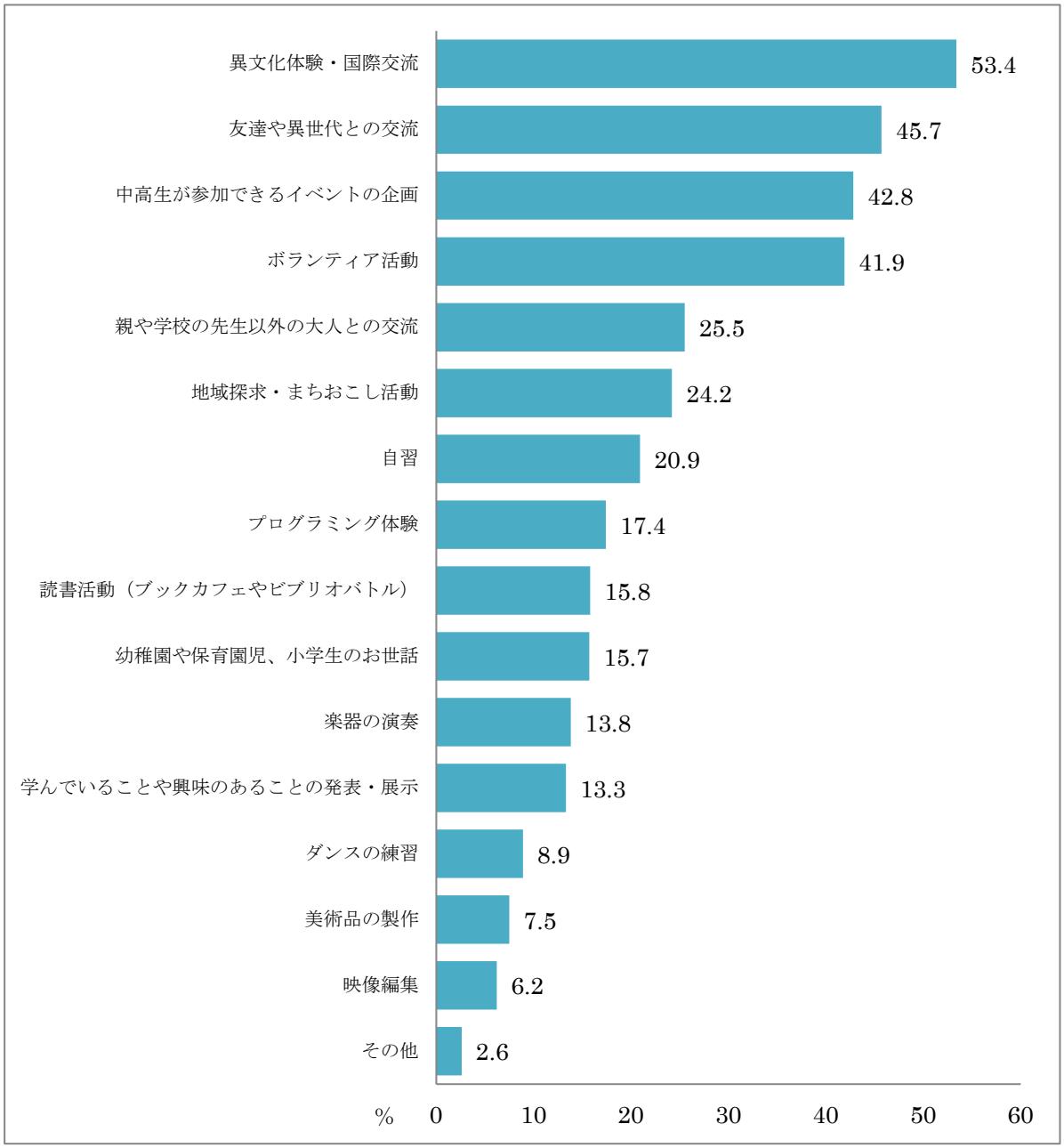


■子どもには国際交流や異世代交流を体験させたい

■地域活動拠点で保護者が望む子どもの活動としては、「異文化交流・国際交流」、「友達や異世代との交流」、「中高生が参加できるイベントの企画」、「ボランティア活動」の順で回答があった。国際化が身近になっている社会状況を反映してか、子どもに対し、気軽に異文化・国際交流ができる場があればと望む心情がうかがえる。中高生が参加できるイベントの企画、ボランティア活動の回答が高いのも、地域活動拠点には、社会貢献を含めた自主的な活動ができる機会や場を求めていることを示している。

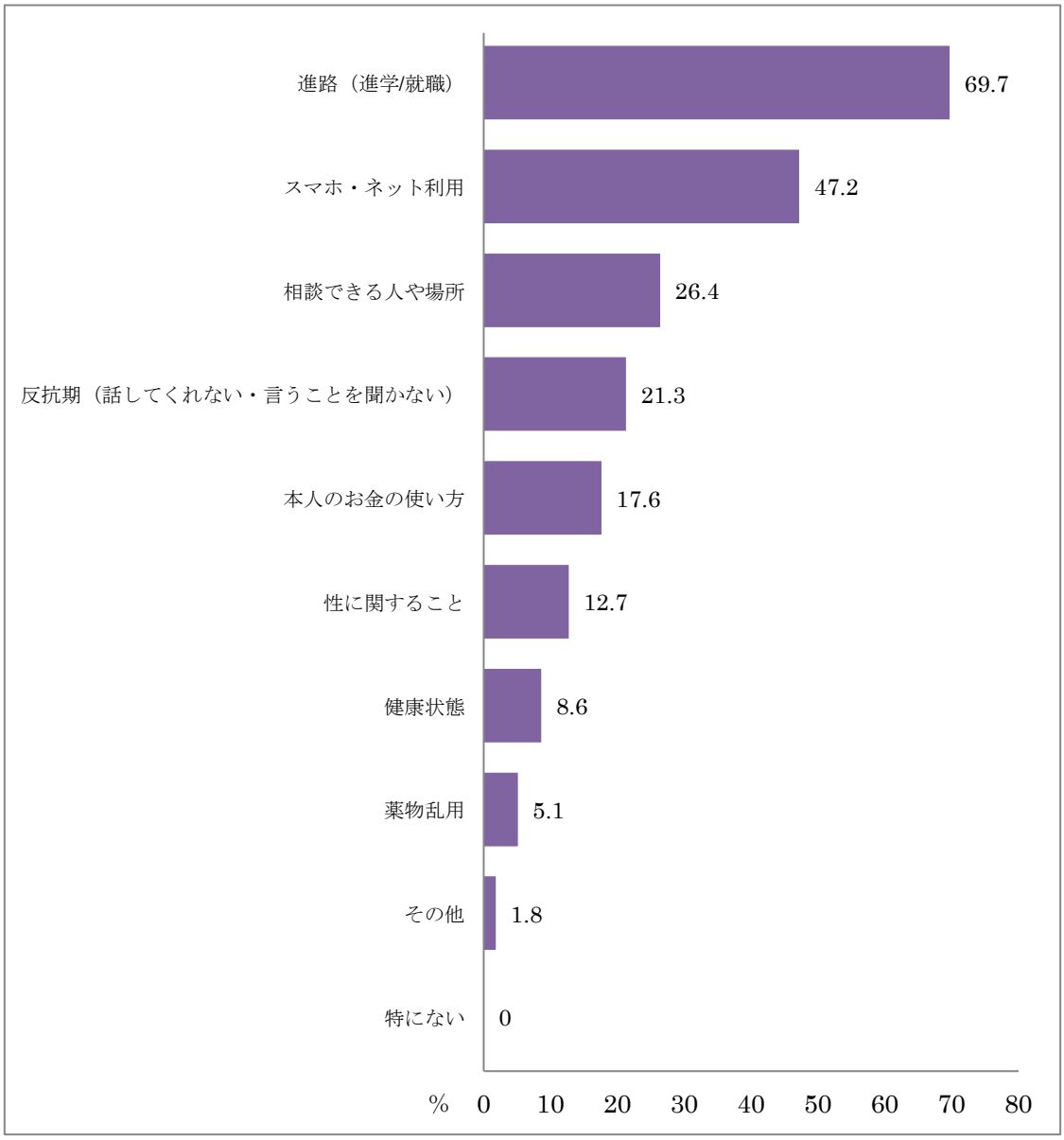
Q「青少年の地域活動拠点」ではどのような活動をしてほしいと思いますか（複数回答）

〔保護者ｎ＝4, 926〕



参　考

■社会の変化に不安を抱く保護者の意識

■子どもを取り巻く環境や知りたい情報は「進路（進学／就職）」、「スマホ・ネット利用」、「相談できる人や場所」の順で回答があった。近年変化する受験制度や就職活動、いじめや犯罪にも繋がるスマホ・ネットの利用、あるいはこれらを含め諸々の相談ができる窓口を求める傾向は社会の変化に不安を抱く保護者の意識の表れであり、相談できる人や場についての情報の発信が求められていると考えられる。

Qお子様自身やお子様を取り巻く環境について知りたい情報　〔保護者ｎ＝4, 926〕